

唐宋代の類書の構成

下柝棚 歩

類書は中国独特の書物のスタイルで、天からの地、人、事、物など宇宙の諸事万物にわたる項目を立て、膨大な過去の書物の引用句を、その類に分類して整理編集した書物である。類書は従来、漢詩文を作るときに参考にされたり、散逸して現代に伝わっていない書物の姿を、類書に収録されている遺文を見ることで垣間見たりするために使われていたが、現在では過去に作られた漢詩文を読み解くための辞典のようなものとして用いられ、また、その類書が出版された当時の知識体系を窺い知ることができるのではないかということから注目を集めている。

類書は大きく、漢詩文作成用と科挙受験用の二つのタイプに分けられる。二つの違うタイプの類書があることはこれまでの研究ですでに述べられているが、具体的にどのように違うのかまでは触れられていない。そこで本研究では、二つのタイプからそれぞれ一冊を選び、漢詩文作成用の類書として『初學記』、科挙受験用の類書として『羣書會元截江網』を取り上げ、これら二書について検討する。そして、二つのタイプには具体的にどのような違いがあるのかを明らかにすることを目的としている。まず、『四庫提要』の中の唐代から宋代にかけて出版された類書についてその解説を読み、唐宋代の類書の概要を把握した。そして、部門の分け方に違いがあるのかを目次等を利用して調査した。続いて、漢詩文作成用と科挙受験用の二つのタイプそれぞれについて代表的であり、かつ規模が適当な類書に絞り、職官部の中の項目の分け方、項目の中がどのような構成で書かれているのか、どのような書物を引用しているのかという点に注目して調査し、比較、分析を行った。

結果として、『初學記』と『羣書會元截江網』では扱っている範囲が異なり、『初學記』は万物にわたり、『羣書會元截江網』は政治、思想などに限定されている。漢詩文作成用と科挙受験用の違いが顕著に表れている。また職官部の項目は、『初學記』は職官名で項目を分け、『羣書會元截江網』は制度の変遷の中に当代の制度を位置付ける項目分けになっている。項目内の構成についても特徴があり、『初學記』はどの項目も叙事、事対、詩文の順序で構成されている。引用書の比較については二書の違いは大きく、『初學記』は時代、書物の種類がさまざま、引用がなされている回数も多い。とりわけ漢時代の史部、経部の書物が多く引用されている。一方、『羣書會元截江網』は『初學記』に比べて圧倒的に引用書の種類も引用の回数も少なく、さらに、引用書は政書に偏っていることが顕著である。

(指導教員 松本浩一)